# 独立行政法人国立女性教育会館に関する省令 （平成十三年文部科学省令第三十一号）

#### 第一条（通則法第八条第三項に規定する主務省令で定める重要な財産）

独立行政法人国立女性教育会館（以下「会館」という。）に係る独立行政法人通則法（以下「通則法」という。）第八条第三項に規定する主務省令で定める重要な財産は、その保有する財産であって、その通則法第四十六条の二第一項又は第二項の認可に係る申請の日（各項ただし書の場合にあっては、当該財産の処分に関する計画を定めた通則法第三十条第一項の中期計画の認可に係る申請の日）における帳簿価額（現金及び預金にあっては、申請の日におけるその額）が五十万円以上のもの（その性質上通則法第四十六条の二の規定により処分することが不適当なものを除く。）その他文部科学大臣が定める財産とする。

#### 第一条の二（監査報告の作成）

会館に係る通則法第十九条第四項の規定により主務省令で定める事項については、この条の定めるところによる。

##### ２

監事は、その職務を適切に遂行するため、次に掲げる者との意思疎通を図り、情報の収集及び監査の環境の整備に努めなければならない。  
この場合において、役員（監事を除く。第一号並びに第五項第三号及び第四号において同じ。）は、監事の職務の執行のための必要な体制の整備に留意しなければならない。

* 一  
  会館の役員及び職員
* 二  
  前号に掲げる者のほか、監事が適切に職務を遂行するに当たり意思疎通を図るべき者

##### ３

前項の規定は、監事が公正不偏の態度及び独立の立場を保持することができなくなるおそれのある関係の創設及び維持を認めるものと解してはならない。

##### ４

監事は、その職務の遂行に当たり、必要に応じ、会館の他の監事との意思疎通及び情報の交換を図るよう努めなければならない。

##### ５

監査報告には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

* 一  
  監事の監査の方法及びその内容
* 二  
  会館の業務が、法令等に従って適正に実施されているかどうか及び中期目標の着実な達成に向け効果的かつ効率的に実施されているかどうかについての意見
* 三  
  会館の役員の職務の執行が法令等に適合することを確保するための体制その他会館の業務の適正を確保するための体制の整備及び運用についての意見
* 四  
  会館の役員の職務の遂行に関し、不正の行為又は法令等に違反する重大な事実があったときは、その事実
* 五  
  監査のため必要な調査ができなかったときは、その旨及びその理由
* 六  
  監査報告を作成した日

#### 第一条の三（監事の調査の対象となる書類）

会館に係る通則法第十九条第六項第二号に規定する主務省令で定める書類は、独立行政法人国立女性教育会館法（平成十一年法律第百六十八号。以下「会館法」という。）及びこの省令の規定に基づき文部科学大臣に提出する書類とする。

#### 第一条の四（業務方法書に記載すべき事項）

会館に係る通則法第二十八条第二項の主務省令で定める業務方法書に記載すべき事項は、次のとおりとする。

* 一  
  会館法第十一条第一項第一号に規定する施設の設置に関する事項
* 二  
  会館法第十一条第一項第二号に規定する研修に関する事項
* 三  
  会館法第十一条第一項第三号に規定する施設の供用に関する事項
* 四  
  会館法第十一条第一項第四号に規定する指導及び助言に関する事項
* 五  
  会館法第十一条第一項第五号に規定する調査及び研究に関する事項
* 六  
  会館法第十一条第一項第六号に規定する情報及び資料の収集、整理及び提供に関する事項
* 七  
  会館法第十一条第一項第七号に規定する附帯業務に関する事項
* 八  
  会館法第十一条第二項に規定する施設の供用に関する事項
* 九  
  業務委託の基準
* 十  
  競争入札その他契約に関する基本的事項
* 十一  
  その他会館の業務の執行に関して必要な事項

#### 第二条（中期計画の作成・変更に係る事項）

会館は、通則法第三十条第一項の規定により中期計画の認可を受けようとするときは、中期計画を記載した申請書を、当該中期計画の最初の事業年度開始三十日前までに（会館の最初の事業年度の属する中期計画については、会館の成立後遅滞なく）、文部科学大臣に提出しなければならない。

##### ２

会館は、通則法第三十条第一項後段の規定により中期計画の変更の認可を受けようとするときは、変更しようとする事項及びその理由を記載した申請書を文部科学大臣に提出しなければならない。

#### 第三条（中期計画記載事項）

会館に係る通則法第三十条第二項第八号に規定する主務省令で定める業務運営に関する事項は、次に掲げる事項とする。

* 一  
  施設及び設備に関する計画
* 二  
  人事に関する計画
* 三  
  中期目標期間を超える債務負担
* 四  
  積立金の使途

#### 第四条（年度計画の作成・変更に係る事項）

会館に係る通則法第三十一条第一項の年度計画には、中期計画に定めた事項に関し、当該事業年度において実施すべき事項を記載しなければならない。

##### ２

会館は、通則法第三十一条第一項後段の規定により年度計画の変更をしたときは、変更した事項及びその理由を記載した届出書を文部科学大臣に提出しなければならない。

#### 第五条（業務実績等報告書）

会館に係る通則法第三十二条第二項に規定する報告書には、当該報告書が次の表の上欄に掲げる報告書のいずれに該当するかに応じ、同表の下欄に掲げる事項を記載しなければならない。  
その際、会館は、当該報告書が同条第一項の評価の根拠となる情報を提供するために作成されるものであることに留意しつつ、会館の事務及び事業の性質、内容等に応じて区分して同欄に掲げる事項を記載するものとする。

##### ２

会館は、前項に規定する報告書を文部科学大臣に提出したときは、速やかに、当該報告書をインターネットの利用その他の適切な方法により公表するものとする。

#### 第六条

削除

#### 第七条

削除

#### 第八条（会計の原則）

会館の会計については、この省令の定めるところにより、この省令に定めのないものについては、一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に従うものとする。

##### ２

金融庁組織令（平成十年政令第三百九十二号）第二十四条第一項に規定する企業会計審議会により公表された企業会計の基準は、前項に規定する一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に該当するものとする。

##### ３

平成十一年四月二十七日の中央省庁等改革推進本部決定に基づき行われた独立行政法人の会計に関する研究の成果として公表された基準は、この省令に準じるものとして、第一項に規定する一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に優先して適用されるものとする。

#### 第九条（会計処理）

文部科学大臣は、会館が業務のため取得しようとしている償却資産についてその減価に対応すべき収益の獲得が予定されないと認められる場合には、その取得までの間に限り、当該償却資産を指定することができる。

##### ２

前項の指定を受けた資産の減価償却については、減価償却費は計上せず、資産の減価額と同額を資本剰余金に対する控除として計上するものとする。

#### 第九条の二（対応する収益の獲得が予定されない資産除去債務に係る除去費用等）

文部科学大臣は、会館が業務のため保有し又は取得しようとしている有形固定資産に係る資産除去債務に対応する除去費用に係る費用配分額及び時の経過による資産除去債務の調整額（以下この条において「除去費用等」という。）についてその除去費用等に対応すべき収益の獲得が予定されないと認められる場合には、当該除去費用等を指定することができる。

#### 第九条の三（譲渡差額を損益計算上の損益に計上しない譲渡取引）

文部科学大臣は、会館が通則法第四十六条の二第二項の規定に基づいて行う不要財産の譲渡取引についてその譲渡差額を損益計算上の損益に計上しないことが必要と認められる場合には、当該譲渡取引を指定することができる。

#### 第十条（財務諸表）

会館に係る通則法第三十八条第一項に規定する主務省令で定める書類は、行政コスト計算書、純資産変動計算書及びキャッシュ・フロー計算書とする。

#### 第十条の二（事業報告書の作成）

会館に係る通則法第三十八条第二項の規定により主務省令で定める事項については、この条の定めるところによる。

##### ２

事業報告書には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

* 一  
  会館の目的及び業務内容
* 二  
  国の政策における会館の位置付け及び役割
* 三  
  中期目標の概要
* 四  
  理事長の理念並びに運営上の方針及び戦略
* 五  
  中期計画及び年度計画の概要
* 六  
  接続的に適正なサービスを提供するための源泉
* 七  
  業務運営上の課題及びリスクの状況並びにその対応策
* 八  
  業績の適正な評価に資する情報
* 九  
  業務の成果及び当該業務に要した資源
* 十  
  予算及び決算の概要
* 十一  
  財務諸表の要約
* 十二  
  財政状態及び運営状況の理事長による説明
* 十三  
  内部統制の運用状況
* 十四  
  会館に関する基礎的な情報

#### 第十一条（財務諸表の閲覧期間）

会館に係る通則法第三十八条第三項に規定する主務省令で定める期間は、五年とする。

#### 第十二条（短期借入金の認可の申請）

会館は、通則法第四十五条第一項ただし書の規定により短期借入金の借入れの認可を受けようとするとき、又は同条第二項ただし書の規定により短期借入金の借換えの認可を受けようとするときは、次に掲げる事項を記載した申請書を文部科学大臣に提出しなければならない。

* 一  
  借入れ又は借換えを必要とする理由
* 二  
  借入れ又は借換えの額
* 三  
  借入先又は借換先
* 四  
  借入れ又は借換えの利率
* 五  
  償還の方法及び期限
* 六  
  利息の支払いの方法及び期限
* 七  
  その他必要な事項

#### 第十三条（通則法第四十八条に規定する主務省令で定める重要な財産）

会館に係る通則法第四十八条に規定する主務省令で定める重要な財産は、土地及び建物並びに文部科学大臣が指定するその他の財産とする。

#### 第十四条（通則法第四十八条に規定する主務省令で定める重要な財産の処分等の認可の申請）

会館は、通則法第四十八条の規定により重要な財産を譲渡し、又は担保に供すること（以下この条において「処分等」という。）について認可を受けようとするときは、次に掲げる事項を記載した申請書を文部科学大臣に提出しなければならない。

* 一  
  処分等に係る財産の内容及び評価額
* 二  
  処分等の条件
* 三  
  処分等の方法
* 四  
  会館の業務運営上支障がない旨及びその理由

#### 第十四条の二（通則法第五十条の六第一号に規定する主務省令で定める内部組織）

会館に係る通則法第五十条の六第一号に規定する離職前五年間に在職していた当該中期目標管理法人の内部組織として主務省令で定めるものは、現に存する理事長の直近下位の内部組織として文部科学大臣が定めるもの（次項において「現内部組織」という。）であって再就職者（離職後二年を経過した者を除く。次項において同じ。）が離職前五年間に在職していたものとする。

##### ２

直近七年間に存し、又は存していた理事長の直近下位の内部組織（独立行政法人通則法の一部を改正する法律（平成二十六年法律第六十六号）の施行の日以後のものに限る。）として文部科学大臣が定めるものであって再就職者が離職前五年間に在職していたものが行っていた業務を現内部組織（当該内部組織が現内部組織である場合にあっては他の現内部組織）が行っている場合における前項の規定の適用については、当該再就職者が離職前五年間に当該現内部組織に在職していたものとみなす。

#### 第十四条の三（通則法第五十条の六第二号に規定する主務省令で定める管理又は監督の地位）

会館に係る通則法第五十条の六第二号に規定する管理又は監督の地位として主務省令で定めるものは、職員の退職管理に関する政令（平成二十年政令第三百八十九号）第二十七条第六号に規定する職員が就いている官職に相当するものとして文部科学大臣が定めるものとする。

#### 第十五条（積立金の処分に係る申請書の添付書類）

会館に係る独立行政法人の組織、運営及び管理に係る共通的な事項に関する政令第二十一条第二項に規定する文部科学省令で定める書類は、同条第一項に規定する中期目標の期間の最後の事業年度の事業年度末の貸借対照表及び当該年度の損益計算書とする。

#### 第十六条（評価に関する庶務）

会館法附則第五条第三項及び第六条第二項に規定する評価に関する庶務は、文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課において処理する。

# 附　則

#### 第一条（施行期日）

この省令は、平成十三年四月一日から施行する。  
ただし、第十六条の規定は、公布の日から施行する。

#### 第二条（成立の際の会計処理の特例）

会館の成立の際会館法附則第五条第二項の規定により会館に出資されたものとされる財産のうち償却資産については、第九条第一項の指定があったものとみなす。

# 附則（平成一八年三月三一日文部科学省令第二四号）

この省令は、平成十八年四月一日から施行する。

# 附則（平成二二年一一月二六日文部科学省令第二一号）

この省令は、独立行政法人通則法の一部を改正する法律の施行の日（平成二十二年十一月二十七日）から施行する。

# 附則（平成二七年三月三〇日文部科学省令第一二号）

#### 第一条（施行期日）

この省令は、独立行政法人通則法の一部を改正する法律（以下「通則法改正法」という。）の施行の日（平成二十七年四月一日）から施行する。

#### 第二条（業務実績等報告書の作成に係る経過措置）

独立行政法人通則法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備に関する法律（以下この条において「独法整備法」という。）附則第十六条第三項の規定により独法整備法による改正前の日本私立学校振興・共済事業団法（平成九年法律第四十八号）第二十六条において準用する通則法改正法による改正前の独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号。以下この条において「旧通則法」という。）第二十九条第一項の中期目標が独法整備法による改正後の日本私立学校振興・共済事業団法第二十六条において準用する通則法改正法による改正後の独立行政法人通則法（以下この条において「新通則法」という。）第二十九条第一項の規定により指示した同項の中期目標とみなされる場合におけるこの省令による改正後の日本私立学校振興・共済事業団法施行規則第二十条第一項の規定の適用については、同項の表事業年度における業務の実績及び当該実績について自ら評価を行った結果を明らかにした報告書の項中「法第二十六条において準用する通則法第二十九条第二項第二号に」とあるのは「独立行政法人通則法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備に関する法律（平成二十六年法律第六十七号）による改正前の法（以下この表において「旧法」という。）第二十六条において準用する独立行政法人通則法の一部を改正する法律（平成二十六年法律第六十六号）による改正前の通則法（以下この表において「旧通則法」という。）第二十九条第二項第三号に」と、「同項第三号から第五号まで」とあるのは「同項第二号、第四号及び第五号」と、「法第二十六条において準用する通則法第二十九条第二項第二号から」とあるのは「旧法第二十六条において準用する旧通則法第二十九条第二項第二号から」とし、同表中期目標の期間の終了時に見込まれる中期目標の期間における業務の実績及び当該実績について自ら評価を行った結果を明らかにする報告書の項及び中期目標の期間における業務の実績及び当該実績について自ら評価を行った結果を明らかにする報告書の項中「法第二十六条」とあるのは「旧法第二十六条」と、「通則法第二十九条第二項第二号に」とあるのは「旧通則法第二十九条第二項第三号に」と、「同項第三号から第五号まで」とあるのは「同項第二号、第四号及び第五号」と、「通則法第二十九条第二項第二号から」とあるのは「旧通則法第二十九条第二項第二号から」とする。

##### ２

通則法改正法附則第八条第一項の規定により旧通則法第二十九条第一項の中期目標が新通則法第二十九条第一項の規定により指示した同項の中期目標とみなされる場合におけるこの省令による改正後の次に掲げる省令の規定及び独立行政法人大学改革支援・学位授与機構に関する省令（平成十五年文部科学省令第五十九号）第五条第一項の規定の適用については、これらの省令の規定中「当該事業年度における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が通則法第二十九条第二項第二号」とあるのは「当該事業年度における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が独立行政法人通則法の一部を改正する法律（平成二十六年法律第六十六号）による改正前の通則法（以下この表において「旧通則法」という。）第二十九条第二項第三号」と、「同項第三号から第五号まで」とあるのは「同項第二号、第四号及び第五号」と、「通則法第二十九条第二項第二号から」とあるのは「旧通則法第二十九条第二項第二号から」と、「期間における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が通則法第二十九条第二項第二号」とあるのは「期間における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が旧通則法第二十九条第二項第三号」とする。

* 一  
  独立行政法人国立特別支援教育総合研究所に関する省令第五条第一項
* 二  
  独立行政法人大学入試センターに関する省令第五条第一項
* 三  
  独立行政法人国立青少年教育振興機構に関する省令第五条第一項
* 四  
  独立行政法人国立女性教育会館に関する省令第五条第一項
* 五  
  独立行政法人国立科学博物館に関する省令第五条第一項
* 六  
  独立行政法人国立美術館に関する省令第五条第一項
* 七  
  独立行政法人国立文化財機構に関する省令第五条第一項
* 八  
  独立行政法人教員研修センターに関する省令第五条第一項
* 九  
  独立行政法人日本学術振興会に関する省令第五条第一項
* 十  
  独立行政法人日本スポーツ振興センターに関する省令第五条第一項
* 十一  
  独立行政法人日本芸術文化振興会に関する省令第五条第一項
* 十二  
  独立行政法人国立高等専門学校機構に関する省令第五条第一項
* 十三  
  独立行政法人日本学生支援機構に関する省令第五条第一項

##### ３

通則法改正法附則第八条第一項の規定により旧通則法第二十九条第一項の中期目標が新通則法第三十五条の四第一項の規定により指示した同項の中長期目標とみなされる場合におけるこの省令による改正後の次に掲げる省令の規定の適用については、これらの省令の規定中「当該事業年度における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が通則法第三十五条の四第二項第二号」とあるのは「当該事業年度における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が独立行政法人通則法の一部を改正する法律（平成二十六年法律第六十六号）による改正前の通則法（以下この表において「旧通則法」という。）第二十九条第二項第三号」と、「同項第三号から第五号まで」とあるのは「同項第二号、第四号及び第五号」と、「通則法第三十五条の四第二項第二号から」とあるのは「旧通則法第二十九条第二項第二号から」と、「期間における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が通則法第三十五条の四第二項第二号」とあるのは「期間における業務の実績。なお、当該業務の実績は、当該項目が旧通則法第二十九条第二項第三号」とする。

* 一  
  国立研究開発法人物質・材料研究機構に関する省令（平成十三年文部科学省令第三十六号）第三条の二第一項
* 二  
  国立研究開発法人防災科学技術研究所に関する省令（平成十三年文部科学省令第三十七号）第三条の二第一項
* 三  
  国立研究開発法人科学技術振興機構に関する省令（平成十五年文部科学省令第四十七号）第三条の二第一項
* 四  
  国立研究開発法人理化学研究所に関する省令（平成十五年文部科学省令第四十九号）第三条の二第一項
* 五  
  国立研究開発法人海洋研究開発機構に関する省令（平成十六年文部科学省令第九号）第三条の二第一項

#### 第三条（業務報告書又は事業報告書の作成に係る経過措置）

この省令による改正後の次に掲げる省令の規定は、通則法改正法の施行の日以後に開始する事業年度に係る業務報告書又は事業報告書から適用する。

* 一  
  日本私立学校振興・共済事業団の財務及び会計に関する省令第十六条の二第三項
* 二  
  独立行政法人国立特別支援教育総合研究所に関する省令第十条の二第三項
* 三  
  独立行政法人大学入試センターに関する省令第十条の二第三項
* 四  
  独立行政法人国立青少年教育振興機構に関する省令第十条の二第三項
* 五  
  独立行政法人国立女性教育会館に関する省令第十条の二第三項
* 六  
  独立行政法人国立科学博物館に関する省令第十条の二第三項
* 七  
  国立研究開発法人物質・材料研究機構に関する省令第十条の二第三項
* 八  
  国立研究開発法人防災科学技術研究所に関する省令第十条の二第三項
* 九  
  国立研究開発法人放射線医学総合研究所の財務及び会計に関する省令第六条の二第三項
* 十  
  独立行政法人国立美術館に関する省令第十条の二第三項
* 十一  
  独立行政法人国立文化財機構に関する省令第十条の二第三項
* 十二  
  独立行政法人教員研修センターに関する省令第十条の二第三項
* 十三  
  国立研究開発法人科学技術振興機構に関する省令第十条の二第三項
* 十四  
  独立行政法人日本学術振興会に関する省令第十条の二第三項
* 十五  
  国立研究開発法人理化学研究所に関する省令第十条の二第三項
* 十六  
  独立行政法人日本スポーツ振興センターに関する省令第十条の二第三項
* 十七  
  独立行政法人日本芸術文化振興会に関する省令第十条の二第三項
* 十八  
  独立行政法人国立高等専門学校機構に関する省令第十条の二第三項
* 十九  
  独立行政法人大学評価・学位授与機構に関する省令第十条の二第三項
* 二十  
  独立行政法人国立大学財務・経営センターに関する省令第十条の二第三項
* 二十一  
  国立研究開発法人海洋研究開発機構に関する省令第十条の二第三項
* 二十二  
  独立行政法人日本学生支援機構に関する省令第十条の二第三項

# 附則（平成二八年四月一日文部科学省令第二三号）

#### 第一条（施行期日）

この省令は、平成二十八年四月一日から施行する。

#### 第五条（独立行政法人通則法の一部を改正する法律等の施行に伴う文部科学省関係省令の整備に関する省令の一部改正に伴う経過措置）

改正法附則第二条第五項前段の規定により機構が受けるものとされる評価については、第六条の規定による改正前の独立行政法人通則法の一部を改正する法律等の施行に伴う文部科学省関係省令の整備に関する省令附則第二条第二項第十四号の規定は、なおその効力を有する。

# 附則（令和元年六月一三日文部科学省令第四号）

#### 第一条（施行期日）

この省令は、公布の日から施行する。

#### 第二条（財務諸表及び業務報告書又は事業報告書の作成に係る経過措置）

この省令による改正後の次に掲げる省令の規定は、平成三十一年四月一日以後に開始する事業年度に係る財務諸表及び業務報告書又は事業報告書から適用し、同日前に開始する事業年度に係る財務諸表及び業務報告書又は事業報告書については、なお従前の例による。

* 一  
  日本私立学校振興・共済事業団の財務及び会計に関する省令第十六条及び第十六条の二
* 二  
  独立行政法人国立特別支援教育総合研究所に関する省令第十条及び第十条の二
* 三  
  独立行政法人大学入試センターに関する省令第十条及び第十条の二
* 四  
  独立行政法人国立青少年教育振興機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 五  
  独立行政法人国立女性教育会館に関する省令第十条及び第十条の二
* 六  
  独立行政法人国立科学博物館に関する省令第十条及び第十条の二
* 七  
  国立研究開発法人物質・材料研究機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 八  
  国立研究開発法人防災科学技術研究所に関する省令第十条及び第十条の二
* 九  
  国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構の財務及び会計に関する省令第六条及び第六条の二
* 十  
  独立行政法人国立美術館に関する省令第十条及び第十条の二
* 十一  
  独立行政法人国立文化財機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 十二  
  独立行政法人教職員支援機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 十三  
  国立研究開発法人科学技術振興機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 十四  
  独立行政法人日本学術振興会に関する省令第十条及び第十条の二
* 十五  
  国立研究開発法人理化学研究所に関する省令第十条及び第十条の二
* 十六  
  独立行政法人日本スポーツ振興センターに関する省令第十条及び第十条の二
* 十七  
  独立行政法人日本芸術文化振興会に関する省令第十条及び第十条の二
* 十八  
  独立行政法人国立高等専門学校機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 十九  
  独立行政法人大学改革支援・学位授与機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 二十  
  国立研究開発法人海洋研究開発機構に関する省令第十条及び第十条の二
* 二十一  
  独立行政法人日本学生支援機構に関する省令第十条及び第十条の二